

平成16年度試験研究課題設定のための要試験研究問題提案・回答書

(整理番号) 48 ※記入不要	<b>提案機関名</b> 湘南地域農業改良普及センター
<b>要望問題</b> いちごの育苗におけるさがみ粒土代替培土の検討	
<b>要望問題の内容</b> 【 背景、内容、対象地域及び規模（面積、数量等） 】 近年、さがみ粒土の精製方法が変わり、物理的・化学的に従来の「さがみ粒土」とは別のものとなってきており、使用方法も従来の単独使用には無理があり、購入培土との混用などが試験されている。 育苗培土の均質化や高品質苗生産に向けた育苗培土の選定や経済性も含めた培土・ポットなどを含めた育苗システムの検討が求められている。  JA湘南いちご部会 31名 337a	
<b>解決希望年限</b>	①1年以内 ②2～3年以内 ③4～5年以内 ④5～10年以内
<b>研究対応区分</b>	①研究所対応 ②委託研究 ③共同研究 ④その他
<b>対応を希望する研究機関名</b>	①農業総合研究所( ) ②根府川試験場 ③三浦試験場 ④津久井試験場 ) ⑤畜産研究所 ⑥水産総合研究所 ( ⑦内水面試験場 ⑧相模湾試験場 ) ⑨自然環境保全センター

※ ここから下の欄は、回答者が記入してください。

<b>回答機関名</b>	農業総合研究所
部 署 :	生産技術部
<b>対応区分</b>	①実施 ②実施中 ③継続検討 ④実施済 ⑤調査指導対応 ⑥現地対応 ⑦実施不可
<b>試験研究課題名</b> (①、②、④の場合)	野菜のセル成型苗等育苗の安定生産技術の開発
<b>対応の内容等</b>	<p>・平成11年の「イチゴの効率的増殖方法の開発」の試験により、「新さがみ粒土（綾瀬浄水場）」単独使用では、イチゴの育苗土として不適であるが、与作等の園芸資材と配合することにより、十分利用できることを明らかにしました。</p> <p>・平成12年度の試験では、小型ポット「イチゴ畑」を使用し、従来の「さがみ粒土」、「新さがみ粒土」、「専用培土」について、比較したところ、生育に大きな差はありませんでした。</p> <p>・平成13年度の有機発酵土の試験では、鉢受け方式の慣行育苗では、苗切り離し時に施肥を行えば、育苗後半の追肥は不要でした。</p> <p>・平成14年度の試験では「新さがみ粒土」に配合する資材（与作、ピートモス、くん炭）の種類と割合の検討を行い、安定な育苗土としての使用方法を検討しました。与作は混合量が1/4量でも2/5量でも変わらず、単独で使わない限り新さがみ粒土は、イチゴの育苗土として利用できることが判明しました。</p> <p>・平成15年度試験 9cmポットにて様々な市販培土を用い、さがみ粒土に変わる資材の検索をしています。</p>
<b>解決予定年限</b>	①1年以内 ②2～3年以内 ③4～5年以内 ④5～10年以内
<b>備考</b>	